

化石研究会第 140 回例会レポート

2013 年 11 月 23 日、滋賀県立琵琶湖博物館で化石研究会第 140 回例会が開催され、「解剖学で探る古生物の生態」というテーマにて、3 人の若手研究者による講演会が行われた。

まず、大阪自然史博物館の林 昭次氏による「化石骨組織から解明する絶滅動物の生理・生態」という演題にて行われた。この講演では、骨を組織学的観点からアプローチすることによって絶滅動物の棲息時の生理や生態を明らかにする「骨組織学：Bone Histology」について、演者の研究成果も交えながら紹介された。恐竜の成長過程による変異を見極める研究や、デスモステルスとパレオパラドキシアと同じ束柱類でありながら、棲息水域が異なるという研究が印象深かった。

次に、名古屋大学博物館の藤原慎一氏による「かたちの違いは機能の違い—筋骨格系モデルによる絶滅四肢動物の前肢の姿勢・運動機能の復元法」という演題にて行われた。この発表では、絶滅四肢動物（ここでは、トリケラトプスといった恐竜やデスモステルス）の前肢の姿勢・運動機能を復元するにあたって、従来の解剖学の教科書の内容を見直し、数多くの種類の標本を実際に解剖・CT 撮像することで大量のデータに基づいて行われた研究に驚かされた。

そして、岐阜県博物館の河部壮一郎氏による「CT を用いた鳥類における脳形態の探究」という演題にて行われた。現生の四肢動物、とりわけ鳥類について、CT 撮像によるエンドキャストを作成することで、脳形態についての基礎データを収集することで、最終的に絶滅動物の生態や系統、例えば、絶滅鳥類プロトプテルムの系統関係といったことを明らかにした研究に強く印象に残った。

今回の 3 人の演者の方は、それぞれ独自の研究手法を確立し、膨大なデータを積み重ねた上で、現在棲息していない絶滅動物を様々な分類群にて、棲息時の生理・生態・系統の復元を行っているのが、共通項として象徴的であった。また、今回の 3 人の演者の方は、私自身と世代の近い方々ということで、研究を進めていく上で、良い刺激を受けることができ、大いに励みになった。

京都大学 大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室 丸山啓志